

國語辭書史

龜田次郎

一

自分は本講座のために我國語辭書史を述べる事となつたが、漢字辭書にも論及した所がある。これは漢字の國訓や、熟語などを收録してゐるものが多いから、其關係で記述したのである。尤も與へられた紙數に制限があるので、極めて簡明に記すより外に途がないので、記述が抽象的に陥つて大に物足らぬ感があるであらうとおもふ。これは事情止むを得ない。只、自分は、我國語辭書の歴史的考察の一端を示し得ば、望は足るのである。讀者諸君に、此點を幾重にも御諒承を願ふ次第である。又一切の著者の姓名を擧げるに際し、便宜上敬稱を省く事にした。これも御許容を乞ふ。

二

我邦辭書の編纂は、古くから行はれたが、全く獨特のものではなかつた。當時先進國であつた支那辭書に其範を採つて作つた様である。本邦辭書の嚆矢と見るべきは、「日本書紀」天武天皇十一年三月十三日の條に「命境部連石積等更張造新字一部四十四卷」とあるのを以てすべきであらう。然し此書は、今日、世に傳はらないから、これを

知るに由なきは遺憾の極である。尤も永享十一年に清原業忠の注進した「本朝書籍目録」に「新字四十四卷境部連石積撰」とあるから、大分後世まで存在してゐた様である。撰者石積は孝徳天皇四年五月遣唐大使に従つて留學生として入唐し、後には齋明天皇五年七月及天智天皇六年十一月に唐へ派遣された人である。當時文才のあつた者である事がわかる。此時撰び載せた文字は、或は梵字様のものであるとか、或は神代文字であるとか唱へられてゐるが、矢張支那文字に倣つて、我邦で新に勅定を以て造らしめ給うたものであらうとおもふ。而して我平安朝初期までに傳來した支那の辭書は、「説文解字」、「玉篇」、「爾雅」、「釋名」、「小爾雅」、「廣雅」、「藝文類聚」、「初學記」、「切韻」、「千祿字書」などがある。此等各種の辭書類は、寛平年間に出來たといはれる藤原佐世撰「日本國見在書目録」に見えてゐる。即當時までに出來た支那辭書類は、大抵渡來してゐた様である。此等の辭書類は、夫々本邦人の讀書や綴文に便益を與へたのであらうが、此平安朝になつて本邦に於ても辭書が作られるやうになつた。僧空海の「篆隸萬象名義」三十卷は其現存最古のものである。此書は支那梁の顧野王之「玉篇」を拔萃したもので、文字の順序、數などは異つてゐるが大體「玉篇」のまゝである。字毎に篆書と隸書とを出し、且反切と意味とを註したもので、字形で類別した辭書である。「玉篇」は、六朝以前或は我奈良朝前後の漢字研究には必要缺くべからざるものである。然るに「玉篇」は唐、宋と時代を経るに従つて、屢改訂され、全く原本の面影を失つてしまつた。而して六朝時代のまゝの「玉篇」は、支那では散佚して、今日では本邦に全體の約半分十四卷半ばかりを存してゐるに過ぎない。それで本書は大體「玉篇」の面影を傳へて居り、且三十卷全體が遺つてゐる。即ち本書は「玉篇」の散佚した部分を補ふ唯一無二のものであり、また現存「玉篇」を校訂するために頗る貴重な資料である。昌泰年間に出來た僧昌住の「新撰字鏡」十二卷は、亦字形で分類したものである。序文によると、「玉篇」は最初参考せず、寛平四年に一旦脱稿した後、「玉篇」を得て増補し、數種の辭書を参考した事が見えてゐるから、「玉篇」と同系のものに基

いたものとおもはれる。此「新撰字鏡」は、字形で分類した外は、分類體を混へた所もあり、又「切韻」から引用した四聲に分けた所もあるが、大體から見ると、字形分類辭書である。漢字を百六十部に分ち、所收の文字約二萬一千。本書の字音、字訓は上記「篆隸萬象名義」と共に日支兩國古代の字音は固より我古語假名字體などの研究に必要缺くべからざるものである。次いで古いのは、源順の「倭名類聚抄」で、醍醐天皇の第四皇女勤子内親王の令旨を蒙つて編したもので、朱雀天皇の承平年間に出來たのである。十卷本と五卷本と二十卷本とがあるが、十卷本が原形を傳へ、五卷本は其合冊本、二十卷本は後人の増補本である。本書は分類體で、二十四部を立て、更に之を百二十八門に分ち、各部門の下に事物の漢名を出し、之に註と和訓とを加へたもので、我古語を知るには貴重な辭書である。分類體辭書としては、本書が現存最古のものであるが、其序文中に見えてゐる「楊氏漢語抄」は十八章に分れてゐるといふから、恐らくは分類體のものであつたであらう。然し今日散逸して傳はらないのである。又菅原是善が十三家の「切韻」を集めて作つたといはれてゐる「東宮切韻」や、藤原季綱の撰とおもはれる「季綱切韻」の如き韻引辭書が、此時代に出來たのであるが、此等は亦散逸して今日見る事が出來ないのである。以上は何れも漢字の辭書である。此平安朝の後半期から歌學が隆んになつて、従うて歌語の語彙を集めて解釋した、藤原仲實の「綺語抄」、藤原範兼の「和歌童蒙抄」等の分類體の國語辭書が現はれた。此時代の末に「類聚名義抄」十一卷が出た。

菅原是善の作と稱せられる。本書は、また「三寶名義類聚抄」、「三寶字類抄」、「三寶字抄」、「三寶類字抄」、「三寶字類集」などの別名がある。全篇を佛、法、僧の三寶に分けた爲に此名がある。觀智院本、西念寺本、蓮成院本、梅尾本などの諸本があるが、觀智院本は複製刊行されてゐる。大體「玉篇」に倣ひ、偏旁によつて漢字を二十部に類別し、多く片假名を以て音訓を註してゐる。本書は假名の字體研究に貴重すべきのみならず、其豊富な訓釋は、平安朝國語研究に重要視される所である。又橋忠兼が、已に以前から存在してゐた「世俗字類抄」を増

補して、天養から治承まで三十餘年を費して作成した「伊呂波字類抄」が出た。二卷本、三卷本、十卷本がある。二卷本は稿本で、三卷本は其増補で、最重要なものである。十卷本は後人の増補に係り、從來學界に流布してゐる。本書は國語を主とし漢字を従とした假名引辭書最古のものである。從來の分類體を併用し、二十一部に分け、實用便宜のために、更に伊呂波の部立をしたものである。此國語を主とした事、伊呂波引である事は、最初の試みであり、此時代の國語研究に重要な資料であると同時に、後世の辭書編纂に大影響を與へた。

三

平安朝までの辭書は大略以上述べた様に、漢字のものとしては、字形引、分類體、韻引のものが、支那から渡來し、又我邦に於てもこれに倣つたものが作られた外に、假名引辭書も出來たのであるが、純粹の國語辭書は、詠歌用の語彙を解釋し、分類體にしたのが有るばかりであつた。鎌倉時代になつても、國語語彙集としては、僧上覺の建久年間に著した「和歌色葉集」や、順徳院御撰「八雲御抄」や、資宗王御著と稱せられる「和訓精要抄」などが現はれたが、此等は何れも分類體で、前二者は、寧ろ、詠歌用のもので、後者は古史の語釋、語源を説いたものである。伊呂波引の國語辭書としては「色葉和難集」(又「色葉和難抄」といふ)がある。これは和歌の難語を集め、其意義を説いたものである。著者を或は僧慈鎮といひ、或は僧祐盛といひ、或は天台宗の僧侶といひ一定しない。内容の記事から見ると、貞應二年以後の作である事は明かであるが、確かな年代を定め難い。

此時代の漢字辭書としては、字形引のものに、菅原爲長之作といはれる「字鏡集」がある。七卷本(寛元頃之作)と二十卷本(應永本)とがある。本書は上記「類聚名義抄」に似てゐるが、漢文の註は、殆ど無く、漢字の傍に音を、訓を下に假名で註して、一層日本化したものである。漢字を偏旁で分類し、更に偏旁を字義に依つて分つて檢

索を容易ならしめた所は、特に注意すべきである。分類體のものには、著者未詳の「平他字類抄」三卷がある。本書は分類體を主とし、伊呂波引を併用した漢和辭書であるが、上記「伊呂波字類抄」は、語を伊呂波で分ち、それを意味に依つて分類してゐるが、本書は先づ意味で分類し、それを平聲と他聲とに分ち、更に伊呂波順にしてゐる。本書は「字鏡集」と共に辭書編纂史上注意すべきものである。

室町時代に入つて伊呂波引の國語辭書としては、長慶天皇御撰「仙源抄」一巻がある。本書は弘和元年に出來たもので「源氏物語」の語彙を、伊呂波順に配列し、簡単な註釋を加へたものである。假名引國語辭書としては現存最古の一つであらう。又竺源惠梵の「類字源語抄」(永享三年成)、月村齋宗碩の「藻鹽草」第二十卷詞部は、詠歌用語の辭書であり、「匠材集」四卷は、主に連歌用の語彙註釋書で特殊な目的のためのものである。

此室町時代に於ける漢字辭書としては「和玉篇」がある。此は「玉篇」の如く文字を偏旁に依つて列ね、其文字の傍及下に音訓を假名で註したものである。體裁は「字鏡集」に類してゐるが、偏旁は「玉篇」の體裁を存して居る。現存最古のものは、長享三年の奥書ある寫本である。原本は大正十二年の震災に焼亡し、今は其複寫本が存してゐる。「本朝書籍目錄」所載の「假名玉篇」三卷も、此「和玉篇」の一種であらう。「和玉篇」は漢字の音訓を知るための通俗辭書として、爾後盛に世に行はれ後、慶長年中に創刊され、爾後屢重刊し、徳川時代を経て、明治の世にまで及んだ。

分類體のものとしては「下學集」二卷(文安元年成)「撮彙集」三卷(飯尾永祥撰、享徳三年成)「類集文字抄」(現存一卷、室町時代の作)などが出たが、何れも主に日用語を漢字で示したものである。此の中「下學集」が最行はれ、後世にも大影響を與へたのである。

此時代に出來た同種の漢字辭書で、假名引の體裁を採つたものに「節用集」がある。此は文明以前に出來たもの

の様である。伊呂波引とし、更に分類體になつてゐるが、此類のものには、大伴廣公の「溫故知新書」三卷（文明十六年成）の五十音引で分類體のものがある。五十音引辭書としては最古い。又著者未詳の「運歩色葉集」四卷（天文十七年成）僧日我の「いろは字」二卷（永祿二年成）は、單に伊呂波分にした丈である。此等は皆通俗辭書として世に行はれたのであるが、その中でも「節用集」は、檢索に便利なので、上記の「和玉篇」や「下學集」と共に通俗辭書として盛んに行はれ、室町の末に既に幾つかの異本が出来、また刊行もされた。後江戸時代に及んでは、屢、重刊増補を行つて最盛を極め、明治時代に入つて泰西の辭書が渡來してそれに範を採つた國語辭書の出版せられる迄は、國語の通俗辭書としては、専、其隆盛を恣にしてゐたのである。江戸時代から明治時代迄に、此「節用集」の刊行された異種、異版は、其數數百部に上る様である。其盛行想ふべきである。

又一方支那では宋元時代に、「廣韻」「禮部韻略」「古今韻會舉要」「洪武正韻」「韻府群玉」などの韻書が出来、此等のものが漸次本邦へも渡來し、其翻刻も行はれたのである。我邦に於ても、此室町時代に「新韻集」二卷が出来た。本書は上記「平他字類抄」の如き漢字の平仄を知るための辭書ではあるが、「平他字類抄」の分類體で、各門を平他に分つて漢字を伊呂波順に配列したに反し、此「新韻集」は、先づ漢字を伊呂波に配列して、其平他を分つたものである。次いで僧虎關師練の「聚分韻略」、「海藏略韻」が出来た。前者は漢字を韻に依つて分つと共に更に同韻字を意味に依つて分類し、其檢索に便なるがため大に世に行はれ、後文明年間に至つて平、上、去三韻の異同音聲の文字を、上中下三段重ねて相對照せしめたものが出来、これを「三重韻」と名づけて廣く後世まで行はれた。「海藏略韻」も、亦「聚分韻略」と同體裁のものである。只諸書の實例を多く掲載したのを異とする。

四

室町時代に於ける辭書は大略述べた様である。尤も此時代の末葉から、日歐交通が創まり、初來の南蠻の耶蘇教宣教師達が、布教上の必要から編纂した辭書類もあるが、此等は後年禁教の爲散逸し、僅少の遺存がある。又この他に江戸時代出版されたものもあるが、此等は、彼等外人の交通上の必要から出来たものであるから、彼等にこそ需用や貢獻があつたれ、直接一般本邦人には、左したる影響も無かつた様である。却つて開國以後傳來した泰西の辭書が、我國語辭書編纂に、偉大な貢獻、影響を與へたのである。而も明治以後の我辭書編纂に範を垂れ、非常な寄與を呈した事は忘るべからざる所である。

江戸時代の漢字辭書としては、「和玉篇」が行はれ、慶長以後、屢、版を改めて刊行され、また宋時代に改修された「大廣益玉篇」が複製され、又音訓を加へて刊行され、次いで明時代に出来た「字彙」が傳來し、或は頭書を添へ、或は假名で音を加へて複製された。従つて此等の體裁に倣つて「和玉篇」に修正を加へたものが多數に現はれ、後、清朝勅撰の「康熙字典」が渡來して翻刻された。茲に於て在來の支那辭典や此等新傳來のものに依つて、我邦の漢字辭書には新式の種々の辭書類が出版されるに至つた。林道春の「多識篇」二卷（寛永七年刊）、貝原好古の「倭爾雅」八卷（元祿七年刊）、伊藤東涯の「名物六帖」二十三卷（享保十一年刊）等の如き分類體にして解釋を加へた漢語辭書も現はれた。又前室町時代に出た「下學集」の如きも、當代に於ては元和、寛永以後、版を重ねて刊行され、「眞草下學集」（寛文六年刊）、「増補下學集」（寛文九年刊）、等の類書が續刊され、益、世に行はれた。假名引漢字辭書としては、前代に出た「節用集」が専ら行はれ、當代に於ては、其重版多く、寛永三年刊行の「二體節用集」以後、多少内容に變更を加へ、尙年を経るに従ひ、或は頭書を施し、或は増補をなし、或は挿圖を加へ、漸次其内容に新機軸を行へるもの續々出版され、其數數百種に及んだ。

假名引の國語辭書としては松永貞徳の「歌林樸樸」二十八卷、著者未詳の「吳竹集」十卷（寛文十三年刊）、有賀長

伯の「和歌八重垣」七卷（元禄十三年刊）等、和歌連歌用の語彙に解釋を加へたものが現はれた。又荒木田盛員の「鵜抄」百卷（貞享二年成）や、海北若冲の「和訓類林」七卷（寛永二年成）の如き立派なものも出て來た。文藝復興古文學の研究が盛んになるにつれ、「萬葉集」や「源氏物語」等に關する特種辭書も現はれる様になつた。五井純禎の「源語梯」三卷（天明四年刊）、池永泰良補正の「萬葉集見安補正」十卷（寛政八年成）は其著しいものである。時を経るにつれ學界の進歩も著しくなり、茲に完備した國語辭書の三大書が現はれるに至つた。谷川士清の「和訓栞」九十三卷、石川雅望の「雅言集覽」五十卷、村田了阿著といはれる「俚言集覽」二十六卷がそれである。「和訓栞」は、廣く一般古言、雅語、口語、俗語、方言に亘り、これを五十音順に配列してゐる。今日から見れば缺陷少しとはせぬが、廣く語彙を蒐集し、語釋も亦穩健で、從來の部分的な辭書に比して、初めて辭書らしい體裁を備へたものといふべきである。安永六年から明治十六年迄に亘つて續刊されたが、明治三十一二年の交洋裝本三冊となつて二種出版された。「雅言集覽」は、歌文を作るための參考書として、主に平安朝の文學書から言語を集め、伊呂波順に配列して、其用例、出典を詳しく記してゐる。一般辭書としては語釋の不充分、俗語の省略等の缺點はあるが、所謂雅言を豊富に集めた點では、實に感服に堪へない。文政九年以後逐次刊行されたが、「い」から「な」までに止まつて、他は未刊に終つた。然るに、文久三年に保田光則は、刊行の部に増補して、「雅言集覽増補」十三卷を、未刊の部に「雅言集覽續篇」三十二卷を作り、中島廣足は全部に増補を加へ、「増補雅言集覽」五十七卷（明治二十年七月刊）を著はして、本書の缺漏を補ふた。「俚言集覽」は、主に方言、俗語を集めて註解を加へたもので、「雅言集覽」に對して編纂されたものとおもはれる。原本の語の配列は、五韻横呼に従つてゐるが、後年出版の井上頼國、近藤瓶城二氏の「増補俚言集覽」三卷（明治三十二年八月—三十三年三月刊）では、總て五十音順に改められ、且語彙、解釋に於ても、多く増補されてゐる。所謂雅言のみが研究された時代に、方言俗語を蒐集した點は、大に異とすべきである。尤も此三大辭書出現の前後には歌文用、雅語俗解、又は、俗語雅釋、類の小辭書が、種々世に出て來たが、一々茲に擧げるに及ばぬ。

特殊的辭書も此時代の初期から漸次現はれて來た。先づ語源辭書として松永貞徳の「和句解」五卷（寛文二年刊、貝原篤信の「日本釋名」三卷（元禄十三年刊）、新井白石の「東雅」二十卷（享保二年成）等が主要なものである。就中「東雅」は前二者の常識的考察を脱して、歴史的に考究して居る。我語源研究上に一時期を劃した名著として推賞すべきものである。又假名遣の辭書としては荒木田盛徴の「類字假名遣」七卷（寛文六年刊）、橋成員の「假名字例」四卷（延寶六年刊）、及「倭字古今通例全書」八卷（元禄九年刊）、の定家假名遣派のものがあり、又之に對抗した僧契沖唱道の歴史的派のものには、此契沖の「和字正濫抄」五卷（元禄八年刊）、「和字正濫通妨抄」五卷（元禄十年成）、「和字正濫要略」二卷（元禄十一年成）を初めとして、掛取魚彦の「古言梯」一卷（明和二年刊）、以下其類書が多く現はれた。世の動亂につれて、變つて行く言葉に對する歎息は標準語、卑俗語の意識を呼び起し、徳川の治下、諸國の人々の往來頻繁となるにつけ、各地方語の接觸の機會を與へて、方言の意識を促進したのである。安原貞室の「片言」五卷（慶安三年刊）は、前者の意味を有つて、越谷吾山の「物類稱呼」五卷（安永四年刊）は後者の意識に基いて出た。「片言」は、著者が其子に正當語と卑俗語とを識別せしめる爲に作つたもので、約八百語を蒐集し、承認さるべき語、避くべき方言、訛語を主とし、間々意義、語源、出典變遷等にも及んで記してある。「物類稱呼」は、當代唯一の方言辭書で、且此方面研究の鼻祖である。此書は、國語研究が、殆んど所謂雅言にのみ限られた時代に、この研究に着手した努力の成果と識見とに感服する。上記「俚言集覽」と共に所謂國語の二大研究書として忘るべからざるものである。又百科辭書ともいふべきものが出で初めた。寺島良安の「倭漢三才圖會」百四卷（正徳二年成）、山岡俊明の「類聚名物考」三百四十六卷、僧大典の「皇朝事苑」四卷、喜多村信節の「嬉遊笑覽」十二

卷（文政十三年成）、屋代弘賢の「古今要覽稿」五百八十四卷等は其主なるものである。尙他に此等の類書も現はれたのである。

五

江戸時代に於ける辭書については概略述べたが、明治時代に入つては幕末安政年間五ヶ國條約締結後、開國となり、歐米諸邦との交通頻に開け、泰西の文物急速に輸入渡來したため、我學術界も俄然進歩發達を來した。従つて辭書の編纂上にも亦舊套を脱して、全く其面目を一新するに至つたのである。

國語辭書としては、維新後、間も無く、文部省で、木村正辭、横山由清二氏總裁の下に、岡本保孝、小中村清矩、神原芳野、黒川眞頼、間宮永好、埴忠昭諸氏に命じ、「語彙」を編纂せしめたが、明治四年十一月に阿の部、同十四年に伊、字の部を刊行し、僅に十二巻を出版したに止まつて、以後の分は中絶して未完で終つた。同省では、更に、大槻文彦に命じて、國語辭書を編纂せしめたが、氏は精勵苦心、八年二月稿を起し、十五年九月一旦稿成り、更に増訂、十九年三月に脱稿し、二十二年五月第一巻を刊行し、二十四年四月出版の第四巻で完成した。これが氏の名著「言海」である。本書は、國語の普通辭書としては、其體裁を具備した最初のものであつて、我辭書史上一時期を劃する不朽の著である。米國の Webster の英和辭書簡約本を編纂の標準として用ひ、從來の辭書は、其採録の語が、多く所謂雅語、漢語に限られてゐたのに、本書は廣く梵語、朝鮮語、和蘭語等に至るまで、一般に用ひるものは採録し、これを五十音順に配列した。語彙總數約四萬。其語彙の豊富なるは勿論、語釋に際して本源的なものを先に、轉用的なものを後に、秩序よく簡明に示した點、その他凡て辭書としての必要條件を略、備へて其編纂組織の整然として居る事等は前例を見ない事で、爾後、國語辭書の模範となつた所以である。廣く世に持囃さ

れ、後三十七年には縮刷本も刊行され、共に版を重ねて數百版に及んでゐる。其行はれた事想ふべしである。是より先、明治十八年には全文假名書きの近藤眞琴の「詞の園」六巻や、二十一年には物集高見の「詞のはやし」一巻や、二十二年には高橋五郎の「和漢雅俗いろは辭典」一巻などが出た。「言海」完成の翌二十五年に、小説家として名高い山田美妙齋が、「日本大辭書」一巻を著して、辭書に必要な具備條項として、音調が缺くべからざるものであると主張し、東京語のアクセントを語彙に記入した。これは注目すべき所である。二十七年六月に、物集高見は其前著「詞のはやし」を増補して「日本大辭林」一巻を公にした。後四十年九月には、この縮刷本も出た。三十一年に出た落合直文の「ことばの泉」一巻は、固有名詞や當時の新語をも集録して語數約十三萬。後四十一年に息直幸に依つて語數約五萬を大正十年から増補され、昭和四年までの間に芳賀矢一に依つて改修されて、更に約十萬語を増加し、空前の語數を收めた。従つて其冊數も多くなつた。然し語彙の釋義は常識的、簡約に過ぎ「言海」の學術的なのは到底及ばない。四十年四月に金澤庄三郎の「辭林」一巻が刊行され、四十四年には増補され、又後年の大正十四年九月に至つては、更に増訂を加へて「廣辭林」と題して出版されたが、普通語辭書の簡便な好著である。明治時代に現はれた國語辭書の主要なるものは大凡これ位である。然るに次の大正、昭和時代になつては、辭書の編纂は愈隆となり、従つて新機軸を出すものが現はれて來たのである。大正元年に芳賀矢一の「新式辭典」一巻が出た。假名引であるのに、漢字の音訓を知らずとも檢出し得る様に畫引索引を附したのが便利である。後、縮刷改修された。四年には、上田萬年の「ローマ字で引く國語辭典」一巻、榮田猛猪、近藤久吉二氏の「ローマ字索引國漢辭典」一巻、井上哲次郎其他の「ABCびき日本辭典」一巻の如き、アルハベット順に配列したものが現はれた。此大正四年から八年十二月までの間に、上田萬年、松井簡治二氏の「大日本國語辭典」四巻が刊行された。現在一般的國語辭書として最進歩したものである。所收の語彙は固有名詞を除き一般日本語、學術語、外來語、

東京附近の方言、熟語、俚諺、格言等二十餘萬、其編纂組織は、略「言海」と同じであるが、其出典及圖解を加へた事は「言海」の缺を補ふもので、其語源の缺けたのは辭書としては一大缺點である。然し本書の價值は其組織の點でなく、語彙の豊富な點と、解釋の詳細な點とにある。其語彙も奈良、平安兩朝期のものは殆ど、網羅して餘さない。只鎌倉期以後のものが、間々漏れてゐる事は語源の除かれた事と共に惜しむべき所である。後昭和三年十月に索引一卷が出版され、同時から四年四月までの間に修正版が出た。四年四月には、藤村作の「新辭典」一卷の簡便なものも現はれた。又近く九年五月から平凡社の「大辭典」二十四巻が毎月刊行されてゐる。本書は採録語數十餘萬、執筆者一千餘名、各方面に亘つて語彙が蒐集してあるとの事だから、現存國語辭書の最高權威であらう。

次に漢字辭書としては當代の初期には在來の「玉篇」、「康熙字典」が用ひられたが、後には「康熙字典」に基いて、音訓や意義を註し、熟語を列舉したものが出た。明治十八年五月から二十一年七月までの間に刊行された大成館の「明治字典」十九巻は、重野安繹を總編とし、中村正直、小中村清矩、エフ・プリンクレ、張磁昉諸氏の校閱の下に編纂され、「康熙字典」を原本とし、「佩文韻府」に依て熟語を加へ、「説文」を注して字義を明にし、本邦所傳の漢吳音、北京音、英、韓、等の音訓を附してある。從來の漢字辭書に比して非常に異彩を放つたものであつたが、業央にして中絶し、完成に至らなかつたのは遺憾である。後年出た三省堂の「漢和字典」一卷（明治三十六年二月）、服部宇之吉、小柳司氣太二氏の「詳解漢和字典」一卷（大正五年十二月刊）、上田萬年、岡田正之、飯島忠夫、榮田猛猪、飯田傳一、共著の「大字典」一卷（大正六年三月）、簡野道明の「字源」一卷（大正十二年六月刊）等は何れも畫引であるが、註解や檢索に新機軸を凝らしたもので、學界に益する所が多い。中には縮刷版を出したのがある。後藤朝太郎、上野三郎二氏の「線音雙引漢和大辭典」一卷（明治四十四年刊）は、漢字を其音に依つて五十音順に配列し、索引として漢字を其線の數に依るものを附した。露國人才・ロゼンベルグの「五段排列漢字典」一

卷（大正五年六月刊）は、漢字を運筆の方向によつて五段に大別し、各字の右、下線に依つて配列した。共に特色あるものである。又當代に於ては、前代に盛行した「節用集」式のいろは引漢字辭書も、澤山出版されて、今日に及んでゐる。日常用通俗辭書としての前代の餘勢に外ならぬ。

特殊辭書は、當代に至つては各方面に亘つて多く現はれて來た。隱語を集めた稻山小長男の「日本隱語集」一卷（明治二十五年八月刊）、京都府警察部の「隠語辭典」一卷（大正十年一月刊）、難訓の語を收録した井上頼國、高山昇、荒田茂丸三氏の「難訓辭典」一卷（明治四十年十月刊）、類語を集めた志田義秀、佐伯常廣二氏の「日本類語大辭典」一卷（明治四十二年刊）、俚諺を蒐集した藤井乙男の「諺語大辭典」一卷（明治四十三年三月刊）、中野吉平の「俚諺大辭典」一卷（昭和八年十月刊）、外來語を集めた上田萬年、高楠順次郎、白鳥庫吉、村上直次郎、金澤庄三郎諸氏の「日本外來語辭典」一卷（大正四年五月刊）が主要なものである。又方言の研究が頗に起り來り、殊に昭和年間に入つて土俗民俗の學、郷土研究の勃興に伴ひ、各地方の方言辭典が續々刊行された。又或古典や、或時代や、或作者の語彙を集めた松岡靜雄の「日本古語大辭典」二卷（昭和四年三月及九月刊）、折口信夫の「萬葉集辭典」一卷（大正八年一月刊）、佐藤鶴吉の「元祿文學辭典」一卷（昭和三年十月刊）、上田萬年、樋口慶千代二氏の「近松語彙」一卷（昭和五年五月刊）等も出た。漢語の故事熟語の辭書として、簡野道明の「故事成語大辭典」一卷（明治四十年十月刊）、池田四郎次郎の「故事熟語大辭典」一卷（大正二年刊）等がある。百科辭典式のものとしては、從前の體裁を襲用した神宮司廳の「古事類苑」六十卷（明治二十九年十一月—大正三年三月刊）、物集高見の「廣文庫」二十卷（大正五年十月—大正七年五月刊）がある。西洋の百科辭典の體裁に倣つたものとしては經濟雜誌社の「日本社會事彙」二卷（明治二十三年十月—明治二十四年六月刊）、芳賀矢一、下田次郎二氏の「家庭百科事彙」一卷（明治三十九年十月刊）、等が其著しいもので、後に増訂を加へられた。尙三省堂の「日本百科大辭典」十卷（明治四十一年十一月—大正八年四月刊）、富山房

の「國民百科辭典」一卷（明治四十一年十二月刊）、平凡社の「大百科事典」二十七卷、（昭和六年十一月以後刊）等がある。中には後年増訂を施して出版されたものもある。近く昭和九年三月から刊行された富山房の「國民百科大辭典」全十二卷がある。完成の曉には斯種の最高權威であらう。又一般文學辭書として、藤村作の「日本文學大辭典」三卷（昭和七年六月—九年六月刊）も現れた。此の方面の最初のもので、諸事項を網羅した好著である。索引辭書としては太田爲三郎の「日本隨筆索引」一卷（明治三十四年九月刊）、物集高見の「群書索引」三卷（大正五年十月—大正六年四月刊）がある。「日本隨筆索引」は大増訂を加へられ、正續二冊となり、正編は大正十五年一月、續編は昭和七年十月に刊行された。又地名辭書としては、吉田東伍の「大日本地名辭書」十二卷（明治三十三年三月—四十二年一月刊）、太田爲三郎の「帝國地名辭典」三卷（明治四十五年六月—同年七月刊）がある。人名辭書としては經濟雜誌社の「大日本人名辭書」二卷（明治十九年四月刊）が出で、後、屢、増訂を加へられて刊行された。鴛尾順敬の「日本佛家人名辭書」一卷（明治三十六年六月刊）、栗島山之助の「日本人名辭書」一卷（明治三十七年六月刊）、大川茂雄、南茂樹二氏の「國學者傳記集成」一卷（明治三十七年八月刊）等もある。栗島氏著の附録、「假作人名辭彙」は、物語、謡曲、戯曲、小説等に作りなされた假作人名を蒐め、其本名、別名、略名等を五十音順に配列し、其人名の下に、其作られた傳を記してある。此方面の嚆矢である。又國史辭書としては八代國治、早川純三郎、井野邊茂雄三氏の「國史大辭典」二卷（明治四十一年三月—七月刊）がある。後に増訂縮刷もされた。又此等特殊辭書としては當代に於て佛教、哲學、商業、經濟、理化學、工學等各科學に互つて、諸種の辭典が刊行されたが、此等は凡て略しておく。當代に於て泰西人の著はした國語辭書の類もあるが、これも省略する事とした。

六

以上敘述した所を概括すると、本邦辭書の編纂は、最初漢土から渡來した字書、韻書があつて、其形式に倣つて和訓を求める爲に出現を見るに至つたが、後、歌學の隆盛に伴ひ漸次詠歌用の國語辭書の出現が初まつて來た。然るに年を経るに従つて、學術の進歩から、次第に各一般方面に互つて部分的のものも出で來る様になり、通俗的のものから、漸次學術的のもの、編纂を見るに至つた。更に海外との交通開け、殊に泰西との交渉が頻繁となり、彼の文物が我に輸入されるに及んでは、一層學術の進歩發達を促進して、全く舊套を脱却し茲に斬新の形式を採つたものが續々出現する様になつたのである。探長補短は我國民の通性である。我國民は直にこれを發揮して、辭書編纂の方面にも應用し、茲に完備したものを出すに至つたのである。要するに我辭書の編纂は、常に其當時の先進國のものを範として、自國に應用して其完成を仕遂げたのである。それで當初は、文物の先進國であつた支那に模範を採り、近時に及んでは、また學術技藝百般の先進國であつた泰西に範を求めて達成したのである。

（附記）

紙数が成限されてゐるので、簡明を旨として、解説や論議は、殆んど、凡て、省略して敘述したが、それでも將に成限を超えんとしたのである。尙記述すべきものを、略したり、漏れたりしたので多くあるのである。只本編は、極めて主要著名なもの丈を、而も概括に記したのである。不備粗漏の所は、偏に諒察寛恕されたいのである。（昭和十年一月二十五日稿）